

(結果および考察)来院時の pHi の平均値は7.45(最高値7.66, 最低値6.98)であった。経過中, pHi 値が0.2以上低下した6例中5例(約83%)が死亡した。すなわち, pHi 値は重症症例の予後と相関すると考えられた。我々は現在, 消化管粘膜病変, ショック, 多臓器不全等の病態における pHi の意義につきさらに検討をすすめている。

33. 脳死患者の胃粘膜について肉眼的および組織学的検討

(救命救急センター) 雨森 明

中枢神経系障害による上部消化管病変の原因について1932年 Cushing は, 脳障害によって視床下部の副交感神経中枢が刺激されるためであるとし, 以降, 中枢神経系の病変によって惹起される胃, 十二指腸潰瘍は, Cushing 潰瘍として知られるようになった。現在まで, 動物を用いた実験によって脳の局在性病変と消化管粘膜病変の発生機序について次第に明らかにされつつあるが, 臨床例で Cushing 潰瘍を組織学的に検討した報告はほとんどない。そこで今回, 高度の脳障害例および脳死例につき上部消化管粘膜病変について, 組織学的および肉眼的観察を行い, 脳疾患と粘膜病変の発生機序について検討し報告する。

34. 大腿腹直筋弁による難治性腹壁瘻孔の治療例

(第二病院形成外科) 松井瑞子

若松信吾・前田華郎・佐武利彦

消化器癌切除に伴う腹壁合併切除術, および種々の原因による腹壁ヘルニア, 腹壁瘻孔に対して腹壁再建術が施行されている。従来再建術には, mesh 等を用いた補綴術が多く用いられてきたが, 最近では皮弁, 筋膜皮弁, 筋皮弁が行われるようになってきた。今回我々は, 3回の根治術にも抵抗した難治性の腹壁瘻孔に対し, 大腿直筋弁と皮膚移植による腹壁再建手術を行い良好な成績を得たので報告する。大腿直筋弁は, 筋弁の挙上も容易であり, また臍上部にまでも十分に到達被覆が可能である。従来までは, 筋弁挙上後の膝の伸展力障害等の機能的障害の発生が危惧されていたが, 我々の経験では, 術後一時的な障害を訴えた症例はあるものの, その後の日常生活においては全く問題はなかった。また, 移行した筋弁は歩行時等に生理的収縮を起こすため, 他法と比較してヘルニアの再発防止効果が高いと考えられる。

以上, 若干の文献的考察を加えて報告する。

35. 特発性後腹膜血腫の1例

(横浜新緑病院外科) 小川真平

井原 寛・大地哲郎

今回我々は急性腹症を呈し来院した特発性後腹膜血腫の1例を経験したので報告する。症例は50歳の男性で突然生じた右上腹部の激痛を主訴に来院した。上部消化管穿孔による腹膜炎を最も疑ったが穿孔部は認めず保存的に加療を行った。後日CT, 注腸にて右腎前面で十二指腸を内側に圧迫し上行結腸肝彎曲部を外側に圧迫しつつ狭窄を呈する20×10cmの腫瘤を認めた。術前には後腹膜原発の悪性リンパ腫を最も疑い開腹手術に臨んだ。腫瘤の大部分は血腫で一部充実部を認めた。腫瘤は十二指腸, 脾, 上行結腸への浸潤を思わせ生検だけで閉腹した。生検の結果悪性所見は認めなかった。2カ月後CTにて腫瘤は縮小し内部均一な低吸収域に変化していた。以上より十二指腸または上行結腸支配の血管からの出血による血腫と診断した。

36. 臍腸管嚢腫を合併した尿管嚢腫の1例

(循環器小児外科) 佐藤 渉

(第二外科) 馬淵原吾

尿管嚢腫は, 胎生期の尿管管遺残であり比較的稀な疾患である。一方, 臍腸管嚢腫は臍腸管遺残で, やはり稀な疾患である。本邦における両者の合併例の報告は我々が検索し得た限りではなかった。今回我々は臍腸管嚢腫の合併を認めた尿管嚢腫を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症例は3歳5カ月の女兒。満期正常分娩にて出生。精神, 身体発達は正常。1歳6カ月時, 2歳4カ月時に臍周囲の膨隆, 発赤を認め, 近医受診するもいずれも経過観察にて軽快, 今回も同様の症状が出現し臍部膨隆が徐々に増大したため当院小児科入院。精査目的に当科受診した。初診時, 腹部は柔らかく, 消化器症状もなかったが, 臍部を中心に弾性硬の発赤を伴う隆起性の腫瘤を認めた。超音波検査にて尿管嚢腫と診断。嚢腫切除術を施行。術後は問題なく経過し退院。現在外来通院中である。

37. 腎外傷の保存的治療についての検討

(朝霞台中央総合病院外科) 山竹正明

八木美徳・堀江良彰・村田 順

腎外傷は実際の外科診療で良く遭遇する疾患だが, 特に鈍的外力による場合には, その治療の選択に悩む場合がある。当院では極力手術の over indication を避けているが, 最近鈍的外力による腎損傷を若干例経験し, 中には明らかな尿の溢流を認めながらも, DIP, US, CT 等で経過観察しつつ保存的療法により高血圧等の続発症を合併せずに治癒した症例もある。これを